

富沢館跡第 29・30 次調査の成果について

1. 調査要項

(第 29 次)

調査地点 仙台市太白区富沢西 1 丁目 8-3 ほか 調査期間 令和 6 年 7 月 1 日～8 月 1 日

調査面積 90.7 m²

(第 30 次)

調査地点 仙台市太白区富沢西一丁目 3-14 ほか 調査期間 令和 6 年 7 月 29 日～9 月 20 日

調査面積 70 m²

2. 調査概要

富沢館跡第 29・30 次調査は、いずれも共同住宅の建築に伴い、太白区富沢西一丁目に所在する富沢館跡で発掘調査を実施した。遺跡は仙台市地下鉄南北線富沢駅から西に約 0.7 km の地点の、名取川の支流である策川によって形成された自然堤防上立地している。かつては水田を主体とした農地が広がっていたが、近年実施された富沢駅西土地区画整理事業に伴う開発が進んでおり、宅地化が著しい。

富沢館跡の周辺からは縄文時代から人々の生活の痕跡が見つかっており、富沢館跡の南に位置する川前遺跡からはスタンプ型の土器や人を模した石製品など、出土事例が珍しい遺物も出土している。土地区画整理事業地内においては古代の遺構も比較的多く見ついている。そのうち富沢館跡の西側に所在する鍛冶屋敷 A 遺跡からは、鍛冶工房と推測される竪穴遺構が見つかっており、鉄製品製作に関連する遺物のほか「謹解 申請稲事 合□□」「大田部」などと刻書された砥石も出土している。

中世になるとこの地域は国人領主である栗野氏の支配下となり城郭が造営される。この館の詳細な造営時期や造営者は不明だが、入生田家に残る『入生田家之故実』と『館記』においては北目城主であった栗野大善の造営によるものとされ、地域の伝承では栗野氏家臣の富沢伊賀守が居住したと伝わる。かつて館であった名残としては、入生田家に隣接し、現在は富沢駅西第 2 公園に残存している土塁と、周囲の田んぼの区画などに堀の跡を見ることができたが、土地区画整理事業に伴いその様相をとどめているのは前述した土塁のみである。土地区画整理事業以降も数次にわたり発掘調査が行われており、館の堀跡などが各所で見ついている。

今回の調査地点は、遺跡の南側（第 29 次）と、東側（第 30 次）部分に該当する。その結果、第 29 次調査では館を区画する堀跡が検出された。検出された堀跡については、これまでの発掘調査でその存在は推測されていたが、今回の調査で堀の底面に障壁と推測される高まりが確認された。これまで富沢館の堀跡からこのような施設は見つかっておらず、今まで知られていない館の新たな様相が判明した。

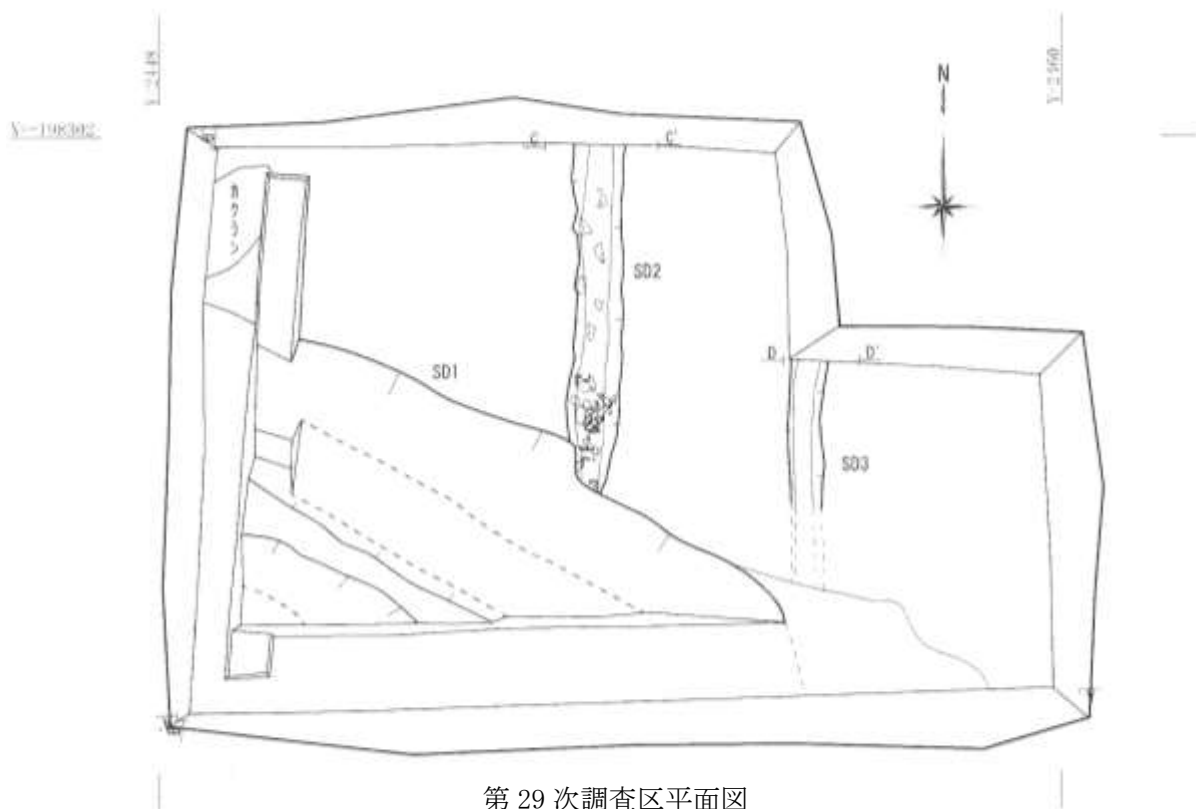
第 30 次調査では、掘立柱建物跡と、池を伴う庭園と推測される遺構がセットで検出された。また当時の人々が使用していたと推測される陶器のすり鉢や陶磁器の碗、石臼などが出土した。出土遺物からこれらの遺構は戦国時代頃のものとして推測される。庭園遺構は仙台城三の丸でも検出されているものの、発見例は非常に希少で、また出土遺物の様相から当時の館跡の人々の生活の一端も明らかになったことは非常に有意義である。



遺跡位置図



調査区配置図



第29次調査区平面図



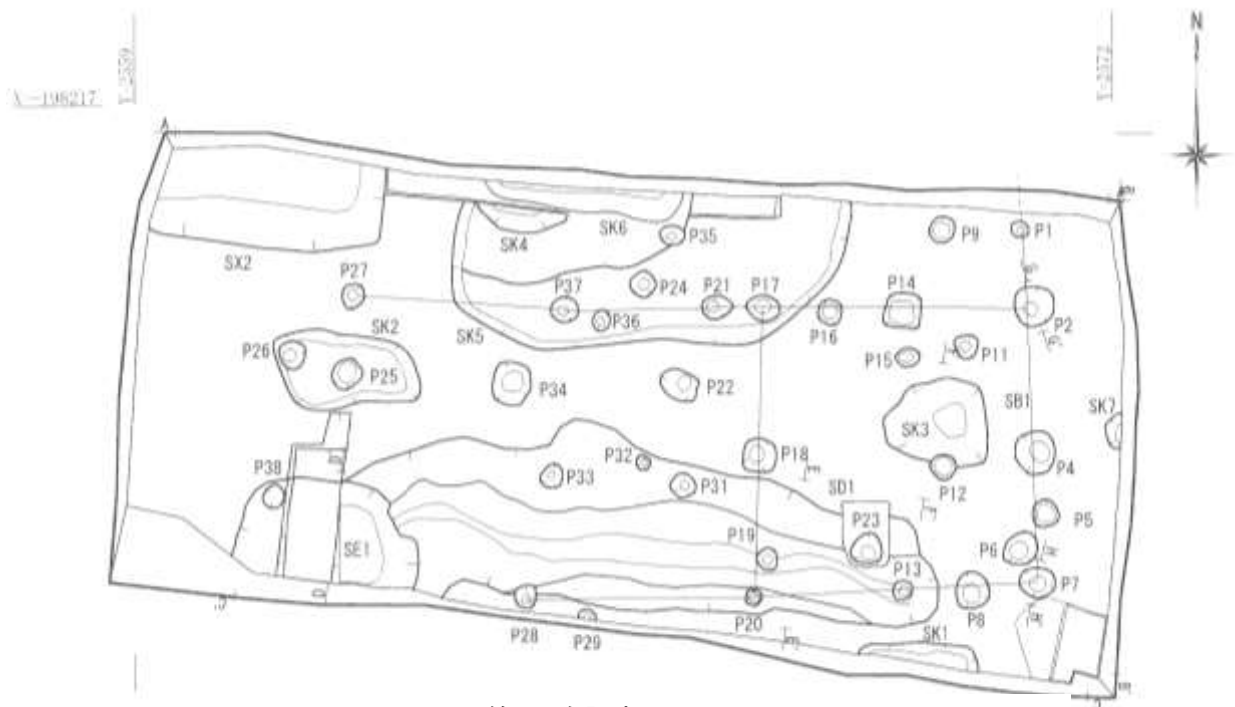
第29次調査区全景（上が北）



堀跡断面1



堀跡断面2



第 30 次調査区平面図



池跡オルソフォト（上が北）



遺物（石臼）出土状況



第 30 次調査区全景（上が北）